

大分県におけるミカン産地杵築市の産地形成過程と今後の展望と問題点

薬師寺 肇
(大分県津久見柑橘試験場)

YAKUSHIJI, H.
Citrus Production in Kituki City, Oita Prefecture
and the Prospect of Future Problems

はしがき

大分県国東半島の玄関口として別府湾に面した杵築市は人口27,000人、戸数6,000戸の柑橘を中心とした

農村都市である。この杵築市の柑橘は第二次大戦までは微々たるものであつたが、戦後それもここ6～7年前から急激に柑橘増植熱がたかまり、いまや1,000ha

を超える大産地となり、理想に近い集団産地として全国的に有名となつたが、その杵築市における柑橘の発展過程と今後の展望ならびに若干の問題点について述べてみたい。

I 産地形成の過程

杵築市における柑橘は明治32年には5ha余栽培されている。その後大正末期から昭和の初期にかけて県内各地から広い原野に目をつけ、入植して柑橘栽培をするものが漸次増加したが、それも第二次大戦勃発に伴い増植も中止のかたちとなつて、その栽培面積も僅かなものであつた。しかし戦後昭和25年頃から県内の津久見、県外の愛媛県等からの入植者が増加し、それに刺激されて地元の農家も漸次柑橘栽培を始めるようになって急激に栽培面積は増加していった。とくに昭和34年以降は毎年100ha以上の増植をみるようになった。

その原因について調べてみると大体次のようである。

1. 全市的に柑橘栽培熱がもりあがつてきた。
2. 立地条件が好適である。ゆるやかな緩傾斜の原野、山林が莫大であり地価も安かつた。
3. 気象条件も柑橘栽培に適している。
4. 県内外の入植者が資金を豊富に持ちこみ成功するものが多い。これに地元民が刺激され、且つ見習うものが多くなつた。
5. 適地が莫大にあり地価も安いので他県とくに愛媛県よりの入植者が多く、いずれも専業大経営という積極的な経営である。
6. 市の農業政策が柑橘重点であり、柑橘により市を発展させると「柑橘興市」のスローガンをかけ全市一丸となつて柑橘熱をもりあげる一方、技術指導陣も充実し適切なる指導をなしている。

第1表 年次別栽培面積と栽培戸数

年 度	栽培面積 ha	栽培戸数 戸
明治32年	5 ?	
昭和20	130 ?	
25	150	?
30	212.0	242
31	243.0	259
32	312.0	328
33	387.9	420
34	432.9	442
35	505.8	5.5
36	626.8	650
37	729.0	790
38	816.0	850
39	946.0	925
40	1,098.0	1,035

第1表 現在栽培者の県別戸数

県 別	34年	40年
愛媛	154戸	198戸
徳島	9	18
広島	4	18
高宮	2	4
高知	7	8
佐賀	4	5
和歌山	2	5
東山	1	1
兵衛	1	1
長崎	2	4
鳥取	1	2
岡山	1	4
鹿野	2	3
青森	1	1
長野	3	10
京都	1	1
山香	3	8
熊川	0	8
富本	0	5
岐山	0	1
福岡	0	1
宮城	0	8
石川	0	3
奈良	0	1
県内	0	1
津久見	39	53
ほか	0	1
計	237	388

第2表 県外移住者の年次別戸数

年 度	入植者戸数
昭和26年以前	90戸
27	8
28	15
29	12
30	15
31	17
32	20
33	43
34	26
35	32
36	28
37	31
38	21
39	8
40	3

7. 柑橘増植も全市計画的にやつている。柑橘産地造成についても次の方針を打出して積極的に指導し、且つ成果を収めている。

- a. 1町地10ha以上の集団が可能であること。
- b. 海拔150m以下で傾斜15度以下であること。
- c. 水源確保可能池があること。
- d. 基幹農道（幅員4m以上）に隣接していること。

以上の如くみかん栽培上最も有利な条件のところを選び産地を造成して来ている。

II 現 況

昭和40年3月で栽培面積1,098ha、栽培戸数1,035戸で、そのうち入植戸数は368戸である。一戸平均栽培

培面積1.06haで、2ha以上のものが120戸を超え、4ha以上のものが20戸近くもあり、最大のもは11haも栽培しているといつたいわゆる大栽培の専業が多い。入植者はほとんど専業の大面積経営であるが、地元農家は柑橘以外に水稲や若干の七島蘭を栽培しているものもある。

また協業（共同）経営のものも少なく第4表の如く12集団もあり、その培面積は154ha、戸数125戸で成果もあがりつつある。共同施設も多いが主要なもので（第5表の如く）115ある。

栽培品種は第6表の如く普通温州が主体で約817haで8割を占めている。将来も温州を中心にして2割内外の早生温州をとりいれる方針である。

第4表 協業（共同）グループ名とその面積及び戸数（法人）

協業名	面積	戸数	摘要
農事組合法人	ha	戸	
〃 大庄石柑橘農園	7.5	10	完全協業
〃 守江第一	15.1	4	部分協業
〃 守江第二	14.6	4	〃
〃 守江第三	14.8	7	〃
暮野岩	13.0	5	完全協業
野田柑橘園	19.1	18	部分協業
永井農園	8.2	4	完全協業
干財	8.0	5	〃
有限会社 林	2.3	4	〃
奈翁江土地改良区	39.4	51	〃
村上農園	4.0	6	〃
有限会社 守江農園	8.5	7	〃
計	154.5	125	

第5表 主要共同施設数

施設名	施設数	受益面積	摘要
		ha	
1. 灌水施設	2	54	地下水益溜池
2. 定配防除施設	23	133.2	5ha以上の施設
3. 撰果施設	3	1,098	オートメーション2ヶ所 セミオートメーションヶ所
4. 貯蔵施設	87		延坪数1,384坪 坪当り平坪収容能力1トン
計	115		

第6表 現在の栽培面積及び生産量と増植計画

	実績(40年)		計画(44年)	
	栽培面積	生産量	栽培面積	生産量
	ha	トン	ha	トン
宮ツ早生	182.6			
興津	48.7	997.9	343.0	3,800
その他	4.7			
林系	343.7			
山系	246.0	4,253.3	1,084.7	13,200
その他	227.8			
普通夏柑	3.7	29.8	3.7	—
甘夏	35.8	289.8	68.6	800
ネーブル	1.7	3.4	—	—
その他雑柑	3.3	3.7	—	—
合計	1,098.0	5,575.9	1,500.0	17,800

Ⅲ 産地形成の特色

杵築市の産地形成の特色としては先に述べたように立地条件が極めてよいので幅員の広い農道が整備して

いること、集団開園が多く一畝数百haの柑橘園が整然としていて壯感を呈していることであろう。そのほか主なところを記すと次の如くである。

1. 産地が若い、1,098haのうち約66%は8年生未満である。
2. 一戸当りの経営規模が大きい。平均1ha以上で園地が分散することがなく1カ所であるので作業能率があがる。
3. 地形がよいので将来機械化、省力化等の近代的経営が可能である。
4. 入植者は全国各地から集まっているが他産地に比し断然入植者が多いことも特色である。杵築市の柑橘園の全面積の6割を占めている。とくに愛媛県よりの入植者が多く入植者368戸のうち愛媛県が198戸と約半数以上を占めている。
5. 生産者の意欲が旺盛で、全般的に生育が揃って良好である。

Ⅳ 杵築市の柑橘の将来と問題点

全国的なみかんの増植、それに伴う生産量の増加、必然的な価格の下落、各産地間の販売競争の激化、それに対するには消費の増加と、生産面におけるコストの切り下げ以外はない。コストの切り下げといつても農薬肥料代はあまり節減の余地もないし、また農薬肥料の価格は今後急上昇するとも思われぬ。しかし労賃は今後益々上昇することは明らかなことである。生産規模の拡大をすればするほどたとえ機械化としても雇傭労力を必要とする。従つて今後生産費切り下げをするには、何といつても労力の節減に努めねばならない。しかるに立地条件の不利な産地はそれが困難であるが立地条件にめぐまれ農道が整備している杵築市の柑橘園は、機械化、省力栽培も可能であるのが何といつても強味である。従つて立地条件の不利な産地がつぶれるようなことがあつても杵築市の柑橘は生残り発展してゆくことは明白である。現在杵築市には先に述べた産地造成条件にあてはまる適地がなお800ha以上もある。津久見地方の如く標高300m傾斜25度のところまで開園するならば数千haの余地がある。最近地価が上昇して入植者は減つたというもの、地元農家にはまだまだ増植熱が強いので、杵築市の目標の1,500haを突破し2,000ha位に達するのも遠い年月ではあるまい。

さりながら将来有望な杵築市の柑橘といえども、若

干の問題点がなさにしもあらずで、以下その点について述べると、気象的には年平均温度16.1度、年間降雨量1,514mmと、まことに柑橘に適した気象であるが詳細に調べてみると局地的に1～2月に寒波が襲来する。また津久見地方に比して降雪も多い。それとこれは九州各県共通の悩みであるが、5、6月の多雨長雨7、8月の高温乾燥9月前後の台風が多いことである。経営的には資金面で借入金の比率が大きく資金返還期に直面して経済的にかなり苦しんでいるのも少ない。これはなにも杵築市に限らず、いづこの新興産地も共通の悩みであろう。新しく開園する場合融資借入金のみによるのは無理で、やはり少なくとも自己資

金を半分は用意しておくことが必要である。

次に杵築市は全国各地から多数の入植者が寄集つている。これは杵築市の柑橘をここまで発展させた原動力ではあるが反面、生産者間の意志統一の点では若干の難があることはいなめない。

次は品種の問題であるが、温州の一大集団地として大発展を予想される杵築市に、僅かではあるが甘夏柑等の有核品種が取入れられていることは、目前の個人の経営からみれば確かに有利であるが、これがため将来かなりの含核温州が出るようになれば杵築市全体の温州栽培のためにはマイナスとなるであろうことが懸念される。